英　　語

乗富章子　池田絵里
笠松幹生　直嵜宏美
戸田真実　基村俊成
増田慎一郎　藤本文乃

1　本校の「英語」

過去１１年間の実績

本校の英語への取り組みは、１２年間に及ぶ。小学校の英語が全国的にも定着しつつある現状を踏まえながらも、その最もふさわしい姿を私たちは求め続けてきた。その間英語「特区」の指定を受けた金沢市立の各小学校では「英語科」が生まれ、大きな注目を浴びている。本校では、教科化は行わず「必修英語」としての道を選び今日に至っている。

「必修英語」としての取り組み

「必修」とは、全学年を対象として学習するが、教科書は使わず、評定による評価も行わない。カリキュラムに従い、時間割り上に位置づけ継続的に行っていく、というものである。必修とした理由は、小学校で英語を教えることの意義、限界、目的等について深く考え、独自の方向を見出そうとしたからである。その結果、小学校の英語教育は、単なる言語指導ではなく、「自分のことを他に伝え、他のことをわかろうとする」というコミュニケーションの基礎としての位置付けが大切であると考えた。

・低学年は隔週
・第３学年以上は毎週
・サブテキストを使用
　3,4年　ABCブック
　4年以上 Word Book
　5,6年 Sunshine Kids

私たちが定めた英語の目標は次のようなものである。

英語の目標

英語によるコミュニケーション活動を通して英語への関心を高め聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を培う

ここでいう「コミュニケーション能力の基礎」としては、「コミュニケーションの基礎としての英語」「教養としての英語」「他の外国語（他言語）を学ぶ基礎としての英語」の三つの側面があると考えている。

コミュニケーションの基礎としての英語

「コミュニケーションの基礎としての英語」とは、人と人がコミュニケーションする場合には、相手の話をよく聞き、相手をよく理解しようとする心構えを持つことがまず大切である。その上で相手の話に対する自分なりの答えや考えを伝えたいと思い、伝えようとする。これが「コミュニケーションの基礎としての英語」という側面である。

教養としての英語

「教養としての英語」とは、まず相手とコミュニケーションをとろうとする時に忘れてはならない「相手を尊敬する」態度や、相手と「仲良くなりたい」と願う気持ちを養うということである。そのためには、相手を大切に思う温かな言葉が求められる。次に、たとえ十分に話せなくても文章が書けたり読んで理解できたりする日本人が多いが、それも「教養」として培われた英語であると言うことができる。将来英語を必要とする子どもの割合がそう多くはないとしても、このような内面に培う英語は何かの形で人格形成に役立つことが期待される。それが「教養としての英語」である。

他の外国語を学ぶ基礎としての英語

「他の外国語を学ぶ基礎としての英語」とは、言うまでもなく英語以外の外国の言葉を学ぶ時に、英語での学び方が役に立つということである。割合として少ないとしても外国語を学ぶ機会のある、または外国語に接する機会のある子供たちに、英語の学び方が何らかの形で役立つことを期待する。それが「他の外国語を学ぶ基礎としての英語」である。

このような基本的な考え方に基づく実績をふまえ、本校の研究テーマにも迫るために以下のような論をもとに実践を重ねている。

2　英語における知識創造

口話中心に英語に接してきた子どもにとって、学んだことをもとにしたとしても、英語を文法的に正しく構文化し発話に至ることは不可能である。では、英語の「知識創造」をどうとらえていくのか。

それは、前述の「コミュニケーション能力の基礎」とした英語の目標に照らして考えることができる。

インプットを多くする

わかりやすい英語を
たくさん聞かせる

自分の言葉としての
アウトプット

その一つは、子どもにとって身近で応用範囲の広い英語を、たくさんインプットすることである。同じパターンで少し使う単語が違うような表現を活動の中にたくさん取り入れるようにする。すなわち、言語材料の蓄積と基本表現の定着を意識して活動の計画をたてることが必要である。

もう一つは、自分の言葉で表現する機会をつくるということである。多くのインプットがあったにせよ、それらが自分とは縁のない表現であってはアウトプットは期待できない。いくつかの選択肢があって自分が言いたいことがどれであるかを考え、選ぶことができるようなインプットがあれば、子どもは安心して自分の言葉として英語を話そうとすると考える。

したがって、英語における知識創造を次のようにとらえる。

基本的な単語や表現にくり返し接することを通して　英語を聞いてそのおよその意味がわかり　コミュニケーションのために自分の言葉として表出しようとする営み

３　英語における「かかわり」の活性化

英語における「かかわり」の活性化を以下のようにとらえる。

- テーマにかかわる活動を理解し、子どもが積極的に英語を聴いたり話したりしている状態。
- 自分が「話す」ために、くり返し練習する、相手の目を見る、うなずく、はっきりと話す、誠実な温かい態度で接するなどコミュニケーションすることへの配慮をもって取り組んでいる状態。

４　「かかわり」を活性化するために

⑴　体の感覚（聴覚、視覚、体感覚）を使って学ばせる

NLP(Neuro-Linguistic Programing ：神経言語プログラミング：コミュニケーション心理学用語)

子どもの個性は様々で、それはそれぞれのＮＬＰ（神経言語プログラミング）が異なっているからだという説がある。英語を学ぶ時にも様々な感覚を刺激しながら学ぶ場を工夫したい。特に英語では、音声表現を中心に学んでいることから、ＡＬＴの話す英語をしっかり聴き取ることができるかどうかが次の活動へのポイントとなる。日本語にはない、英語独特の発音があるので、ＡＬＴの口元を見つめて聴き、目を合わせて話すことを常に子どもに働きかけていく。同時に、視覚という意味で具体物、絵のほかに文字も発達段階を考慮しながら取り入れていく。体感覚として、シミュレーションも含めてより具体的な体験的活動を十分に取り入れる。このように視覚、体感覚を使った聴き取り方も工夫したい。

⑵　ＡＬＴとＨＴの協同的な体制をとる

インプットはＡＬＴが

慣用句はＡＬＴから

学習計画や方法はＨＴが

ＡＬＴが子どもと直接かかわる時間をできるだけ多く設けるために、英語のインプットはＡＬＴが主に行う。クラスルームイングリシュを含む慣用句や子どもへのほめことばを積極的にインプットする役も、ＡＬＴが中心となる。ＨＴもＡＬＴの後に続けて言い、効果を高めるように心がけたい。

学習活動そのものやインプットの方法については、子どもの実態をよく知っているＨＴがカリキュラムに従って学習計画をたて、ＡＬＴと十分に話し合う。ＡＬＴとＨＴが協力し両者のコミュニケーションが十分とれているような学習の雰囲気を作ることが大切で、その効果があればあるほどインプットされた英語は共有され、効果的な表出が期待される。

⑶　基本表現の位置付けを明確にする

本時がどんな基本表現を扱っているのか、それまでに子どもはどこまで学び、どんな表現が身についているのかについて、教師がしっかり把握しておくことが大切である。その上で、基本表現とされた言葉のどの部分を子ども自身が考えたり、選んだりできるところなのかを明確に示す必要がある。

それはたとえば、I can play tennis. のような基本表現を学ぶ場合に、He can ～.
を子どもが自分の言葉として表現することを求められているのか、I cannot ～. なのか、I can play baseball. なのか、I can swim. なのか、これら全ての表現が対象とされているのかを、教師とＡＬＴがしっかり打ち合わせを行って、その方向を一致させておかなければならない。